ববাব

১৮৮৩

শ্রীহরিপদ

শ্রীহরিপদ

特100
178

ちょッと目につく高嶋田

東武雄著
山田みのる挿畫

大正
8. 3. 17
内交

サアあゝんお
しよ……
フゥ……
うまいか……
かうして月給
の三分二を
食つてしま
ふんだ……

これが粋なのよ……
お世話さま高等出齒龜
かも知れないよ

あなたのやう
な眼尻さ
がりがあり
ますかッ……
ウヲッ
いたいッ

剩餘は宜い！

乃公たちの級友間に、

『剰餘は宜い……。』

と云ふ言葉が非常特別に流行したことがあつた。

只だ、顔さへ見ると、

『剰餘は宜い……。』

を浴びせかけるのだ。友人同志顔見た時ばかりでなく、電車に乘つても、道を歩いて居ても、ちよつとした美人にでも會ふと、

『剰餘は宜い……ハ、、、、、語源など云ふと、ちと

と云ふのであつた。

「剰餘は宜い」の語源……

難かしい研究的の言葉になつて、興味を缺く恐れがあるので、此處では、其の起因といつた方が穩當かも知れない。

それで復へ――として、其の「剰餘は宜い」の起因を尋ねるとかうだ。

或る時のことだ。高橋君と元町で逢つた時に、

『オイ見たか、白井……。』

と、而かも突然に、藪から棒に、突拍子もない聲で、乃公にかう訊いた。

あまりに突發的なので、乃公には何が何だか、何の事だか、薩張りちつとも判らない。

「何を……？。」

と乃公は聞き返した。

「何をってあれをさ……。」

益々判らない。

「あれをとは……。」

「あれをとはと云って、ほら菊坂のを……。」

いよ〳〵解せない。

「菊坂のって……何だ？。」

「煙草屋の……。」

流石に級間で、秀才といはれた乃公も、まるで狐にでも魅まれたやうだ。

「煙草屋の何を……。」

「して見ると、まだ見ない、いんだな……。」

これはおかしい。高橋君一人で極めてゐる。益々いよ〳〵判らない。

「もどかしいなア、何だい、早く云へよ。」

と、乃公が急き込むと、

「フン、どつちがもどかしいか知れたもんか、あれを見ないなんて……。」

奴乃公が見ないからと云つて、あべこべにもどかしがつてゐる。

『菊坂の煙草屋の何だ……煙草屋に、何かめづらしいものでも居るのか。』

『ウム、居る！。』

『どんなめづらしいものがゐるんだ？。』

『素的な奴がゐる！。』

『素的な奴つて、ブルドックのか……？。』

『駄目〳〵、君は話せないよ。』

『なぜ？。』

『なぜつてさうぢやアないか、苟くも此の高橋がだ。宜いか、素的もしい奴と、讃賞するからには、そんな四脚の動物なんぢやないぞ……。』

『ヘエ、おかしいねえ、どうも、僕には何だかちつとも判らない……。』

『君も話せん奴だなア……大概見當がつきさうなものぢやないか……。』

『……。』

『まだ判らんのか……又會はふ、左樣なら……。』

高橋君はスタ〳〵と行かうとするから、乃公はあはてて高橋君の

袂を捉へた。

『オイ高橋……。』

『なんだ！。』

『なんだちやアないよ。君は僕に不得要領なことを話しかけて、それでハイ左様ならと云つて行くといふことがあるか、サア要領を得るまで話してから行きたまへ！。』

『だつて君のやうな話せない奴があるか。』

『話せないと云つて、君が話さないから話せないんだ。サア事明細に話し玉へ！。』

『宜し、ぢや話さう……ウム待て〳〵、話しをするよりも、これから菊坂といへば直きなんだから、實物を見せよう……。』

『さうか……。』

『さうすりや、話よりも何よりも一番早く分る。即ち百聞は一見に如かずだ。』

『ぢや行かう……。』

と、乃公は勇み勇んで、これぢやまるで戰爭にでも行くやうだが……。

……高橋君と連れ立つて、本郷の通りに出て、あれから元の活動寫眞の角から、左りに菊坂の方に折れて行つた。

やがて小さな、煙草屋の前に來ると、

『あれだよ！。』

と高橋君が云ふので、乃公はヒョイと見ると、其の煙草屋の店に年頃十七八の、頗ぶる以てふるひつきたいやうな高島田の美人が坐つ

てゐた。

『なるほど……ウム〳〵〳〵。』

『オイ〳〵白井、なんだ君は、ウム〳〵〳〵なんて、そんなところで、立ちどまつてうなるもんだから、見ろ高島田が見てるぢやないか……。』

『見て呉れて結句幸福だ……ウム〳〵。』

乃公はしばらくといふものは、つくりつけられたやうに動けなかつた。

其の高島田は、色といつたら、雪の上に眞綿を敷いて、其の上に白大理の球をころがしたやうに、眞白とも眞白とも、これより白い

ものがあるだらうかとうたがはれる位。そして其の眼と云つたら、太からず小さからず、鈴を張つたやうで兩方ともよく揃つてゐる。尤も不揃ひだつたら片目だが……まだ〳〵そればかりぢやないぞ、其の面眼に、何とも云へぬ、男の野郎を……男の野郎が重複するが、そのなんだ、男をチヤームする何ものかが宿つてゐて、ニツコリ笑ふと、齒があらはれるが、其の齒がまた美しいの何のつて、水晶を割つて列べたやうで、而かも其の唇といつたら、紅いと云つて毒々しい紅さでなく、勿論紫色や、灰色や、コバルトなどではないのだ。それが水も垂れるやうな、高島田に結つて坐つてゐるところは、とても助からない。別に向ふぢや、乃公を殺すと云

はないが、腦殺されずんば止まざる底の美人だ。

『オイ〳〵白井、宜い加減にしろよ。』

『何を……。』

『何をつて見るのをさ……。』

『乃公は何にも見てゐるんぢやないぞ。』

『ぢや來たら宜いぢやないか、なんで立ち停つてるんだ……？。』

『ナニ、君も知つてるだらう、毎年年頃になると、乃公は脚氣でなやまされることを……今輝れが來てゐるところなんだ……君急ぐなら先きに行つて呉れたまへ。』

『アッハ、、、、、胡魔かしはうまいぞ……。』

『否や胡魔化しぢやない、眞箇なんだ……ア痛ッ……どうもいかん……。』

もう一度あの高島田が、此方を見て、乃公にあの顏を拜ましして呉れたら、乃公は此處を立ち去らうと思つてゐたが、なか〳〵此方を向いて呉れない。

『宜し〳〵、見なきや見ないやうに、此方に考へがあるぞ……。』

と、ヅカ〳〵と店先きへ行つて、

『君、オリエントを一つ呉れ給へ……。』

と云つた。

『ハイ……有り難ふございます……。』

と、ニッコリ笑つて、オリエントの上に、マッチをのせて呉れた。

乃公は此のニッコリで、身體がゾク〳〵とした。乃公の全身の血は、まるで沸えくり返つてしまつた。

「オイ……白井、細かいのがないから、乃公にも一つ買つて來ないて呉れ……。」

畜生ッ、附け込んであんなことを云つてるな。と思つたが、此の美人の前では、到底ケチなことも云はれない。ケチなことでも云つて見ろ、大學生の癖に、ケチ臭いと思はれる。僅かなことで、そんなことを思はれるのは殘念至極と、

「ちやもう一つ呉れたまへ、あいつなんか、バットでも澤山だけど

……。」

惡い奴だ。乃公が偉がりたいために、友人のことを貶してゐる。

「かしこまりました……。」

と、また一つマッチをのせて呉れた。

「ちやまた貰ひますよ。」

ブブッ、煙草を買つて、また貰ひますと云つて來る奴がどこにあるだらうか……

それから二人は女子美術學校の前に折れた。

「どうだつた？美人だらう……。」

と高橋は乃公に聞いた。

『ウム……ちよいと目につく高島田だね……。』
『時に白井、君はこれから……。』
『乃公は歸るんだが、君は……。』
と乃公が尋ねると、
『乃公は、別に何處へ行かうと云ふ的もないから、乃公も歸らう……。』
と云ふので、
『それぢや春日神社の前まで一緒に行かう。』
と乃公が云ふと、
『ウム……。』

それから二人は、春日神社の前へ出て、
『ヤア失敬……。』
『失敬……。』
と別れて、高橋君は二三歩行つたが、
『オイ……白井、ちよいと待て。』
と引つ返して來たので、
『何だ？。』
と乃公も立ち停ると、
『内證だよ。』
と云ふ口調で、

『何を……。』

と乃公が聞くと、

『何をつて、あの高島田のことさ……。』

と云ふので、

『どうして、人に話しちや不可といふのか？。』

『さうだ！　皆なに話して見ろ、吾れも吾れもと出かけるだらう。』

『なるほど……。』

『さうなると、しまひには彌次連までも出かけるから、あの家でも近所の手前もあるので、あの美を店に坐らせないやうになる譯だ。して見ると拜顏の榮を擔ふことが出來なくなるから、乃公たち二人

ヅ限りの專有物として置いて、樂しまうぢやないか。』

と云ふのだ。

『イヤ判つた。そんな譯なら、大いに贊成するよ。』

『ぢやもう歸るね……。』

『ウム……。』

『もう今日は行かないだらうね。』

『ウム、行かない……。』

『ぢやアまた今度一緒に行かうね。』

畜生ッ、又オリエントを一個せしめようと思つて……。

『ウム、一緒に行くのは宜いが、細かいのがないからは眞平だぜ。』

『アッハ、、、、。』

『ハ、、、、。』

『左樣なら……。』

『失敬ッ……。』

乃公たちは右左りに別れたが、

『まて〳〵、もう一度よく見て來よう。高橋の奴がゐたもんだから

よく見なかつたから……。』

乃公は高橋には、歸る風に見せかけて置いた、又元來た道をとつ

て返し、例の高島田の煙草屋の前に立つて、

『ヤア先刻は失敬……ナナを一個呉れたまへ。』

滅多に買つたこともない煙草を買つて、中から一本拔きとつて、

マッチを摺つて火をつけてゐると、直ぐ煙草屋の横の路次から、高

橋がヒョッコリ、

『ヤア……。』

と聲をかけた。

『ヤア……ウム〳〵〳〵。』

『君また此方に來たのか……。』

と、高橋はいやに笑つてゐる。

『ウム〳〵〳〵、そのちよつとそのなんだ、思ひ出した用があつた

のでね。君も歸るのは此方ぢやないぢやないか……。』

『ウム〳〵、乃公も君と同じさ……オイ濟まないが、乃公にもナナを一個買つといて呉れたまへ。』

アッ、畜生ッ、まるで高橋の奴め、厄病神と同じだ。弱身にばかりつけ込みやがる……

『宜し來た。ちやア君、もう一つ呉れたまへ。』

心のうちでは、あんまりよし來たでもなかつたが、此の高島田を前に置いては、ケチなことも云へない。

フン高島田の奴め、眞紅な面をして、白魚のやうな手で、瓶の中からナナを一個取り出して呉れた。

ア、勿體ない、冷たいでせう。僕がとつてあげませうと云ひたかつた。

二人は又一緒になつて、今度は本郷の通りに出た。

『オイ高橋、どうしたといふんだ、君は？。』

と乃公が云ふと、高橋君は、乃公からせしめたナナに火を點けながら、

『乃公よりかも、君はどうしたといふのだ。ハ、、、、。』

と聞き返すので、

『乃公は先刻云つたやうに、ちよいと思ひ出した用があつたので……。』

と云ふと、

「嘘を吐け、君は男らしくない奴だな。兜を脱げ、乃公を出し抜いて、高島田を見に戻つて來たんだらう。乃公は君と別れたが、もう一度島田を見ようと思つて、用もないのにやつて來て、今度は通りから行くのも變だと思つたから、態と路次に入つて、あすこから出て來たのだ。」

事理明白、相手がかうして、兜を脱いで、赤裸々に云つてゐるものに、乃公一人が匿してゐるといふのは、いかにも男子らしくないと思つたので、

「アッハ、、、、乃公も同じくだ。」

と白狀すると、

「さうさ、さうにきまつてる。乃公も心のうちちや、大方君もやつて來はせぬかと思つてゐたところだ。ア、よかつた……。」

「何が……？。」

「何がと云つて、今一足おそいと、君にオリエントなり、又はナナをやられるところだつた。ハ、、、、。」

一人悦に入つてゐるが、乃公の方では、ちよいと島田の顔を見たばかりで、奴にオリエントとナナと、一個づゝせしめられたのだ。あゝつまらない。

「サア、今度はほんとうにお互ひに歸らう。」

と高橋君が云ふので、

『ウム、今度はお互ひに出し抜きつこなしだ。』

と、左右りに別れたが、乃公も眞直に家に戻つた。

ところが、此の高島田のことは、乃公と高橋君との二人の專有物のつもりでゐたところが、紅は、どこに置いても眼につきやすいもので、

『オイ見たか。』

『何を……？。』

『菊坂の煙草屋の高島田を……。』

『イヤ見ない！。』

『一遍行つて見たまへ！　素的だよ。』

といふやうな會話が、級友間に交されるやうになつて、忽ちのうちに誰れ知らぬものもないやうになつた。

サアかうなると、お互ひに競爭だ。

『君ナナを一個呉れたまへ……。』

『毎度ありがたう存じます。五十錢でございますね、只今お剩餘を……。』

と、ロダンが刻んだ、大理石の手のやうな、美しい手を、錢函の中へ入れやうとすると、

『否や、君剩餘は宜い！。』

と氣前を見せる。

『でもこんなに澤山――。』

と金の音をさせる。

『宜いです〳〵……。』

と行きかけると、

『マア……ほんたうに濟みませんわねえ……。』

と、うれしさうに、恥かしさうに、紅い顔して云ふのがまた、無上に嬉しい、此の上もない光榮として、誰れでも其處へ行つて、十錢のものを十錢で歸つたものがない、

『オイ、君、朝日一個……。』

などゝ云つて、十錢銀貨や、クチャ〳〵になつた紙幣を投げ出す

やうなものは、此の高島田を拜顏して、其の手づから煙草を授かる資格を有しないものと相場が極つた。

中にも、西尾君の如きは、勿驚嘆の高島田のところへ、一ケ月二十一圓也を奉つたが、正味の煙草の代價は、僅かに三分の一にも過ぎないといふ。扨ても宜い面の皮なのは、國許の兩親だ。悴がかうして高島田の許へ、奉つてゐるとは御存じなく、ヤレ靴を買ふとか、帽子を買ふとか、原書を買ふからなどゝ云つてやれば、それ靴や帽子が破れたりなんかしてゐては、肩身が狹からう。本を買うといふなら、何は扨ておいても送らなくちやならないと、電報爲替で送つてよこす。悴はそれを受取ると、直ぐに菊坂の高島田のと

ころへ出かけて、

『君、オリエントを二個呉れたまへ！。』

と、一圓紙幣を投げ出して、

『宜い！　宜い！　剩餘は宜いです……。』

を極め込むんだから、親ばかちやんりん、たまつたものにあらずだ。

かうして級友間、我れこそ高島田を捕虜にしようと、力み返つてゐたところが、豈圖らんや、級友間でも、一番貧乏な、而かも何時もボロ〳〵の着物を着て、高島田のところへ行つても、十錢銀貨を出して、バツ一を一個買つて、四錢の剩餘をとる。一錢お持ち

合せはございませんかと來ると、

『サア、あるかも知れない。』

と云つて、汚ない蝦蟇口の底を叩いて、五厘銅貨を二つ出さうといふ、服部君に札が落ちて、服部君は到頭其の家に入り込んで、其處から通學するやうになると、島田はバツタリ店に出なくなつて、いつも皺くちやの婆さんがチヨコナンと坐つてゐるやうになつた。

『オヤ〳〵ッ、何のこつたい……馬鹿々々しい。』

『服部奴、うまくやりやがつたな、あんな貧乏な奴に、惚れる島田も島田ぢやないか……。』

と云ふやうな話は、誰れの間にも交はされて、ポカン〳〵と、あだ

かも古瓶屋の土間と同樣、開いた口ばかりだつた。

しかしだ、一歩ひるがへつて、而かも冷靜に考ふるにだ。服部のやり方は、如何にも飾らない、男らしいやり方なのだ。十錢のものなら十錢置けばそれで宜い筈だ。それを二十錢も五十錢も投げ出して來るといふのは、愚も甚だしい。どうせそんな男なら、又他にそんな美人でもあると、矢張り同じ轍を踏むに違ひないと、島田の方で思つたらしい。

かうなると、苟くも最高の學府たる、帝國大學の學生の吾々はだ。僅かに高等小學も卒へない位の、一小煙草屋の娘に及ばぬこと數等……赤面汗顏の至りではあるまいか。

其の後服部のところへ遊びに行つたものに、島田くづして丸髷結ふて曰く、

『お剩餘は要らないなんて、つまらない氣前を見せる人なんかにかぎつて、きつと浮華輕佻なものよ……。』

と、ウワッ……浮華輕佻はおどろいた。何れは服部を敬へたんだらうが、金をうんと使つて、而して笑はれてりや世話はねえや。

此の服部とおさまるまでが、即ち、

『剩餘は宜いー』

なる語が、最も全盛を極めたのである。

オット危険だ

乃公が大學を出る前から、折々乃公の父親と母親の間には、乃公の妻のことについて、話が交はされてゐた。

『ハ、、、、いよ〳〵乃公も、學校を出ると、直ぐに妻を持つんだな……有り難い〳〵。』

と、乃公はひそかに、身體をゾク〳〵させてゐた。

『だが待てよ。妻を有たして呉れるのは宜いが、一體どんなのを持たして呉れるんだらうな、震ひつくやうな美なら好いが、チンクシャだの、おかめだのと來ちや助からないね。南無兩親大明神、何卒美人の妻をさづけたまへ……アーメン。』

イヤまて〳〵、所謂封建時代ならば、親がこれにせえといへば、

いやが應でも、どんなチンクシャでも、おかめでもおでこでも、乃公は至はブタ〳〵の大道臼でも、大きに有り難ふございますと、お受け頂戴をしなければならなかつたかも知れぬが、苟しくも二十世紀の今日、總ての舊弊を打破した、否な打破しなけりやならない今日、そんなことは斷じて許さないぞ。見ろ、一國でも、專制政治などゐ許さないで、自由平等を叫んでゐる今日ぢやないか。戀は神聖なものだ。

『フン、親の妻ぢやなし、乃公の妻ならば、乃公が好きな妻を貰ふのが當り前だ。またそれは何も不思議なことはない筈だ。』

と、かう考へつくと、なか〳〵以てどう致しましてぢや、

「これにしろッ……。」
と云つても、
「ハイ〳〵左樣でございますか。」
と、直ちに忝けなふするやうな乃公ぢやアないぞ。
「先づ第一に容貌と品性は……。」
と、反問して、選擇するだけの權利は、當然乃公に屬するものなんだ。
「ナア……。」
「何です……？。」
「大崎の方の話のね。」

「えゝ……。」
「乃公は至極よからうと思ふがね。」
「さうですねえ、よささうですね。」
「どれ、もう一度寫眞を見せて見な……。」
「一遍見たら判つてるぢやありませんか。そんなに何度も見なくつたつて……。」
「イヤさうぢやない。大切の悴の嫁ぢやないか、念を入れた上にも念を入れなくちやアなア……。」
「宜いですよ。もう見なくつたつて……。」
「お前も妙な奴だね。出して見ろと云つたら、出したら宜いぢやな

いか……。』

『不可ませんよ。大崎さんがあの寫眞を持つて來た時に、あなたが御覽になつて、イヤに眼尻を下げて、ダラリとしてゐらつしたから……。』

『馬鹿だなア お前は……悴の嫁にどうだらうと云つて持つて來たものを、乃公がどうもかうもないぢやないか……いゝ年をして、つまらないことを云ふもんぢやない！。』

『何ですつて、あなたこそいゝ年をして、大崎さんが持つていらつした島田の寫眞を見て、眉尻を下げて涎を垂らしていらつしたぢやありませんか……。』

『馬鹿なことを云へ……。』

『否え、あなただつて、さう〳〵堅いことも云はれますまい。妾が妹の家に、五日ばかり泊りがけで行つてゐた留守に、あなたお清にどんなことを云つたりしたりしましたか……。』

オヤ〳〵、阿母さんが、此の春から、叔母さんの家に取り込みごとがあつて、五日ばかり泊りがけで行つて、家を明けたことがあつたが、あの留守に、お父さんは女中のお清に、何か云つたかしたんだなア、フン、いゝ年をして、お互ひにつまらない喧嘩をしてゐるもんだ。だがまてよ、乃公の妻にどうだと云つて、大崎さんが寫眞を持つて來たのを、果しておッ母さんが云ふ如く、お父様が

眉尻を下げて、涎を垂らして見て居たと云ふのが事實だとすれば、誠に以て言語道斷、物騒千萬だ。大體乃公のお父さんは、至つて女には甘いらしい。

とこんなことを思つて、乃公は默つて聞いてゐた。

「つまらないことを云ふもんぢやない。」

と、お父さんが打ち消すやうに云つて、

「見せないとあればそれで宜いが、どうしたもんだらうなア……。」

ウフ、、、お父さんゴマ化してゐるぞ。ところがどつこい、お母さんもしたたかもの、其の手は桑名の燒き蛤だ。

「ゴマ化さなくつたつてようございますー　サア妾が五日ばかり留守

にしてゐたときに、あなたはお清にどんなことを言ひました。」

「どんなことつて、何にも云やしない。」

「云やしないことはありませんよ。遂ひぞ揉ましたことのない腰を揉ましたり、肩を叩かしたりして、あなたはお清を口說いたでせうが……。」

ウワッ……あの年をして、あのブタ〳〵の、山出しのお清を口說いたとは滑稽だ。一體どんなことを云つたんだらう……其の時の面が拜みたかつたわい。

「馬鹿ッ、つまらない……そんな。」

とは云ふものゝ、お父さんの旗色はなか〳〵よくない。

『駄目ですよ。あなたがいくら匿したかつて、ちやんと本人のお清から聞いたことなんですから……。』

『そゝ、そんな馬鹿なことを云ふとは不都合な……。』

と、お父さんは憤慨して見せる。

いよ〳〵以て面白くなつて來たぞ。ワシケ〳〵。

『駄目でございますよ。あなたがいくら何とおつしやつても、妾が歸ると直ぐ、あなたのことですもの、大方そんなことでもありはしなかつたかと思ひましたから、半襟一つ買つてやつて、妾がいない時に、旦那がこんなことを云やしなかつたかへ、こんなことをしようとしたらうと聞いて見ると、すつかり話してしまひましたよ。』

『そりや其の半襟が欲しさに、宜い加減な嘘を云つたのさ……。』

『おつしやい。あなたがどこまでもさうして强情をお通しになるんなら、あの子は、妾がそんなことを聞いたから、これは家に置くと今にきつと、妾が馬鹿を見なくちやならないと思ひましたから、直ぐと暇を出しましたが、現在松葉町の家にゐますから、あの子を呼んで來て、つきつけて話しをして見ませうか……。』

オヤ〳〵、益々事が重大になつて來たぞ。おッ母さんはお清を呼んで來て、對決をやらうと云ふんだな。おッ母さんが叔母さんのところから戻つて來ると、急にお清に暇を出したから、妙なことだと思つてゐたら、扨てこそ其麼根膽があつたのか。お父さんもお父さ

んだと

「そんなことをしなくつても宜い……。」

「それどらんなさい。お清を此處へ連れて來たら、一言半句もないでせうが……。」

「ウム〳〵ありやアそのなにサ、串戲だよ。」

お父さんとう〳〵本音を吐いてしまつた。

「串戲ですつて？　串戲にも主人たるものが、奉公人に向つてそんなことを云ふべきことですか。妾しや串戲だとは云はせませんよ……。」

「あんな奴……からかつたんだよ。」

「からかつたとおつしやるが、からかつたものが、手を取つて引き入れますか……。」

ホウ、して見るとお父さん、なか〳〵猛烈なことをやつたと見えるな。

「ウム〳〵もうそんなつまらないことは止せ〳〵。」

「イエ、あなたはつまらないことをおつしやるが、妾の身にとつて見れば、決してつまらないことちやありませんから、云ふだけのことは云つて置かなくちやなりません。ほんとうに、あなたなんか、あぶなくて、滅多に女中なんか雇はれやしません。」

なるほど、道理で乃公の家の女中は、來る女中も來る女中も、み

んなブタ〳〵の山出しみたいのでなければ、片目だとか、跛足だとか、滿足なものが來ないんだな。

『馬鹿な……お前といふものが居るのに……。』

ハ、、、、、お父さん、大分下手からおだててきたな。

『あなたは昔から、二口目には、お前といふものが居るのになんておつしやるが、妾が居るのにもかゝはらず、發展ばかり爲さるぢやありませんか。』

オヤ〳〵、乃公のおッ母さんも、大分現代語を覺えて來たな。一體發展なんか、どつから習つて來たんだらう。

『乃公がいつ發展した？　お前一人をちやんと守つてるぢやない

か。』

『それ、あなたが、そんなかたいことをおつしやるから、妾の方であらを拾ひたくなるんですよ。』

『でもお前が、ありもせぬつまらないことを云ふからさ。』

『ありもせぬつまらぬこととは云ひませんよ。現にあの紅一がお腹にゐる時、妾は六月腹を抱へて、初めてのお產ではあり、ウム〳〵うなつてゐるのに、あなたは本所から來てゐた、まだ十七やそこいらの女中のおはるに手をつけなすつて、とう〳〵姙娠にしてしまつたところが、あの娘の父親といふのが、有名な惡漢だつたので、大切な娘に疵をつけたと云つて、とう〳〵二百五十圓といふお金をと

られた上、出來た子供の始末までもおつけにならなくちやならないやうな酷い目に遇つたことがあるぢやありませんか……それでもかたいことが云へますか……。」

オヤ〳〵、これは乃公も初耳だ。して見ると乃公のお父さんは、なか〳〵どうして、隅に置けない代者だな。近所では、白井さんのお宅ぢや、年頃の息子さんがゐらつしやるから、故意とあんな變な醜い女中ばかり置くんだらうと云つてゐるが、フンどう致しまして此の息子さんは至つて堅いものだが、父親の方があぶないからなんだ。乃公こそ宜い面の皮だ。

「此の親にして此の子あり……。」

つて、ヘン、馬鹿にして貰ふまい……。

「どうです?」

おッ母さんグッと一本突つ込んだ。

「ウム〳〵〳〵、そんな古いことを……。」

と、お父さん一言もない。眞實だと見える。

「なんですつて、古いこと……ぢやもつと新らしいところを申しませうか……。」

オヤ〳〵、取りかへ引つかへ、新舊なか〳〵あると見えるぞ。

「もう宜い〳〵、そんなこと……。」

「否え、あなたが古いことは、効能がないやうにおつしやるから、

極く新らしいところで申上げませう……遂ひ去年から此の春にかけてからのことぢやありませんか。どうも毎日會社からのお歸りが遲くなつて、時によると、夜の十一時や十二時になつてお歸りになるし、其のたんびに、やれ誰れの家へ廻つて來たから遲くなつたとか、歸りにズッと謠の方へ行つたとか云つてゐらつしたが、蛇の道や蛇で、これはと妾も勘づいたから、或る時、今夜は下田のところに廻つて、碁を打つて、晩飯もあすこで御馳走になつて來たとおつしやるから、あゝさうですか〳〵と聞いてゐて、翌日になつて、お淸を下田さんのところへ、昨夜宅の主人がまゐりまして、どうも御邪魔を致しました。ついては歸りに、小さな風呂敷包をお宅に忘れて歸つては居りませんでしたでせうか……と聞きにやると、案の條、妾が思つてゐた通り、お宅の旦那樣は、昨夜はお出でになりません。もう此の二ヶ月ばかりは、ちつともお出でがありませんから、それはどつか他樣と違ひは致しませんかと云はれて、お淸が歸つて來たから、サアかうなれば此方のものと、あなたのお歸りを待ち受けて、あなたは昨夜下田さんにいらつしたといふことでしたが嘘でせうと云ふと、誰が嘘なんか云ふものがあるかとおつしやるから、實はこれ〳〵でしたよと云ふと、あなたは急にドキッとした顏を爲すつて、ウム〳〵、實は吉田の家だ……とおつしやるから、駄目でございますよ。もう今日は、朝からお淸を、あなたの御懇意な

家に、みんな聞きにやりましたら、どこでもちつとも入らつしやらないといふことでしたよと、妾がカマをかけると、流石のあなたもグッとおつまりになつたぢやありませんか。それからだん〳〵調べて見ると、神田の新銀町の、藥屋の二階を借りて、上方女を圍つて、毎日會社からお歸りには、其のお妾のところへ、脂下つてゐらつしたぢやありませんか。そして妾に攻められて、手を切るといふ段になると、先方の女が碌な奴でないから、百圓の手切金を呉れなけりや、毎日お宅と會社の方へ、お小遣をいただきにまゐりますといはれて、あなたはブル〳〵慄へあがつて、遂々百圓の手切金を出しなすつたでせう。それはちやうど此の春の花見頃のことですか

ら、よもや古いことは云はれますまい。もつと新しいことなら、たとへ手をつけなかつたまでも、お清の一件もございますよ……。」

おや〳〵、几帳面な、嚴格らしい風をしてゐても、お父さん、フン、そんなお安くない筋があつたんだな。

「つまらんことを復習するもんぢやない。そんなことをお互ひに洗ひ立てれば、お前にだつて可なりあるからなア……。」

オヤ〳〵、今後はお父さん逆襲と出かけたぞ。いよ〳〵以て此の戰爭は面白くなつて來た。世界の大戰に比べると、局面は至つて狹いが、興味はより以上だぞ。

お父さんは、逆襲の武器に、どんなものを使用するんだらう。

『なんですつて？　妾に……濟みませんが、妾なんぞには、そんなみだらなことは、爪の垢ほどもございませんよ。』

『ないことがあるものか、七八年前に置いといた、永山と云ふ書生が、厭に色が生白くて、男前がちよつとして居たので、乃公を會社に出したあとでは、もう永山々々と云つて、小遣ひをやつたり、乃公に秘密で着物を拵へてやつたり、袴を仕立てゝやつたりしてゐたぢやないか。乃公は、これはと思つたが、そんなことを云つて、事を荒立てゝは、子息たちの手前、世間の手前もあるからと思つて、乃公はぢつと我慢をしてゐたのだ。それでもお前は、みだらなことがないと云へるか……。』

乃公が子供の時分に、永山といふ書生がゐたことがあるが、あの書生をおッ母さんがどうかしてゐたのか知ら、隨分だらしのない人だな。

『マア、あなたは何をつまらないことをおつしやるんです、あんな子供見たいなものを、それに妾があの子を可愛がつてゐたといふのは、そんなみだらなことではございませんよ。それはちやんとあなたも知つてゐらつしやるぢやございませんか。あの子はあの通り、親も兄弟もなんにもない、孤兒ですから、可哀さうだと思つて、特別に目をかけてやつてゐたのですよ。』

『駄目だ〳〵。いくらなんとお前が辯解しても、それは駄目だぞ。

何時だつたか、乃公が神戸の方へ出張して、十日ばかり家を明けたことがあつたらう。其の時お前は、子供たちはうつちやらかし、女中に打ち任せて置いて、毎日永山を伴れて、活動だの、芝居だのと出あるいて、事によると夜の十二時一時になつて歸つて來て居つたといふぢやないか。たとへ家の書生でも、もう十九二十歳にもなつたものと、活動や芝居に行つて、夜の十二時一時までもマゴついてゐて、あやしくないといへるか。』

『まてよ、さう云へば、乃公もたしかに覺えてゐるぞ。お父さんは留守だし、お母さんは、乃公たちは伴れないで、永山とどつかへ出かけて、乃公たちが夢でも見て、眼をさましてゐる頃、お鮨だと

か、いろんなものを、毎晩のやうに買つて來て呉れてゐたことがある。それはたしかに覺えてゐるが、なるほどそんなことだつたのか、お互ひに、追々と舊惡が露顯するぞ……。

『馬鹿なことをおつしやい。あれはなんですよ。』

『あれはなんですよぢやない。あの後乃公が、其のことを耳にしたから、お前を責めると、あなたがゐらつしやる間は、もう御無沙汰ばかりしてゐますので、どなたのお宅へお訪ねしただの、どこの奥さんのお伴をしてどうだのと云つたが、乃公が其の人たちに會つた時に、妻が參りまして御厄介になりましてなどゝ禮を云ふと、ヘエといふやうな顏をして、お宅の奥さんは、もう三年越しお見えにな

つたことはございませんがなどと云ふので、お前が嘘を云つたといふことは、直ぐに知れたぢやないか、それでも乃公は男だ。默つて忍んでゐたが、お前がさうして乃公のことを云ふと、乃公の方でも云ひたくなるのだ！。』

『一じすよ。そんなことなんかありませんよ。決して、あなたこそ、[illegible]へいらつした時に、ヤア大阪の南の新地だの、中の島だの曾根崎だので、隨分御愉快をなすつたといふぢやありませんか。』

『ハ、、、、、自分の方の都合が惡くなつたものだから、またそんなことを云ひ出して、乃公をゴマ化さうとしてゐる。』

『否え、ゴマ化しぢやありません。大體あなたは浮氣性なんです

よ。』

『乃公が浮氣性だ？。』

『さうですとも……。』

『そんなことがあるものか……。』

『否え、吉村の奥さんも、いつかおつしやつたことがございます。』

『ナニ、吉村の妻君が、乃公のことをか？。』

『えゝ……。』

『なんと云つた？。』

『お宅の旦那さまは、あんなおやかましいやうなお顏をしてゐらつしやるが、あれでなか〳〵お心は至つてお若くてゐらつしやいます

わねえとおつしやるから、まつたくですよと云ふと、宅にいらつしやつても、女中が御案内を申上げると、途中で、女中のお尻をつゝいて見たり、誰れもゐないと、お座敷で手をお握り遊ばしたりなさる、ほんとうにおもしろいお方といつて、女中がいつもお歸りになつたあとで話しを致すのでございますよとおつしやいましたよ。あなたは、家でばかりでなく、他所樣に入らつしてからまでも、そんなことをなさるなんて、マアゝなんと云ふ呆れたお方なんでせう？。それでも浮氣ものでないとおつしやいますか。』

『馬鹿ッ、そりやお前が、吉村の妻君に焚き付けられてゐるんだよ。』

『否え、あの方ばかしは、決してそんなことはございません。あなたが實際そんなことを爲さるからなんでございますよ。』

『そんなことがあるもんか……。』

『否え、ちやんと、立派に吉村の奥さんがおつしやつたのですから、間違ひはありません。妾は……そんなことを聞くと、口惜しくて〳〵たまりません。』

オオ〳〵、ちよつと聲が變になつて來たぞ。

『馬鹿だなアお前は……。』

『えゝ、馬鹿でございますよ。馬鹿ですからあなたにそんなことをされるのです。ですから、あの大崎さんが、紅一の嫁にどうだらう

かと持つていらつした島田に結つた、あの娘の寫眞を見ると、眼尻をグッと下げて、涎まで垂らしてゐらつしたぢやどざいませんか、これはあなたの方があぶないと思ひましたから、なんなら見會をと云ふのを、妾が見合せてゐるのですよ。紅一との見會なら好いが、あなたとの見會になるかも知れませんから……。』

『オイ〳〵、つまらないことを云ふのも、宜い加減にして置かないか……。』

『否え、妾はお腹の虫がおさまるまでは申しますよ。まつたく、滅多に紅一の嫁だつて、貰へはしませんわ。』

『馬鹿ッ……。』

『否えさうなんです、あなたのことですもの……。』

然り〳〵、實際そんなだと、危險ともく。子のものは親のものだなんて、妻まで占領されてたまるもんか。危險な父親があつたもんだ。

『お前のやうなことを云つてゐた日にや、紅一の嫁だつてなんだつて貰へるものか。』

『さうですとも、ですからちからあやふやばかりで、どれもこれも、いい加減な返事ばかりしてゐるんですよ。』

これはおどろいた。父親の出齒式が危險なために、乃公の妻をあやふやにしてゐるとは……、失難なのは、悴紅一の此の乃公だ。

『宜い年をして、馬鹿なことばかり……。』

『あなたこそ、いゝ年を爲すつて、若い女とさへ見れば、どんなものでもかまはないといふやうな、だらしのないことをなさるからなんですよ。』

なか〳〵以て、此のおさまりがつきさうもない。乃公は初めつから、默つて聞いてゐたが、自分たちの嫉話喧嘩にのみ花を咲かして、肝腎の乃公の妻問題なんかは、どつかに吹き飛してしまつた。

『あゝ、こんな親を有つと、厄介なものだ。』

と、嘆息をしてゐると、

『マア兄樣、あなたそんなとこで何してゐらつして……？。』

不意に妹がやつて來た。

『ウム……そのなにさ……なんでも……。』

乃公は大いに面喰つた。

妹は變な顏をしてゐたが、

『お父樣はゐらつして……。』

『サア、乃公もちよつと用があつて今此處まで來たところだ。』

『さう……。』

と云つて、

『お父樣ゐらつして……。』

と、妹が唐紙を開けると、乃公の顏もニユッと出たので、兩親も

大いに面喰つたらしい。

『ではさうすることに致しませうか……。』

『ウム〳〵。』

何がさうすることに致しませうだ。ゴマ化してゐらア。

『お父様、あの植木屋の爺やが、庭のことで、お父様にちよいと見ていたゞきたいつてますよ。』

と妹が云ふと、

『フン、乃公がいつ他所へ行つて、女中の尻をなでたり、女中を口説いたりした。』

と云ふやうな顔をして、

『ウムさうか、いま行く〳〵。』

『紅一は、何か用かへ……。』

と、今度は母親が乃公に聞いたので、

『エヽ、實は先刻から、此の室の外まで來てゐましたが、なんだかあなた方が、意見の衝突でもなすつたやうでしたから、今まで控へて居ましたが、それが爲め、肝腎の自分の用を忘れてしまひました。』

『エッ、紅一お前聞いてゐたのか？。』

と父親が云ふと、母親も妙チキリンな顔をして、

『ヤア、お前先刻から……。』

と、おどろいた樣子。

『どうなすつたの、どんなことを兄樣聞いて？。』

と妹が聞くと、

『餘計なことを聞くものぢやありません。富美子や、こんなことがありますよと云はれたなら聞いてもよいが、人の話なんか、どんなことだなんて聞くもんぢやありませんよ。』

『でも……。』

と云つて、乃公とそれから、兩親の面を見比べてゐた。

『早くあつちへ行つて、爺やにさう云つて置かないか。』

鷄の一聲、父親の威光は大したものだ。

『フン、こんな父親でも……。』

馬鹿ッ、親の惡口を云ふ奴があるかッ……。

尤も今年十八の、娘に聞かされた話ぢやないわ、ウフ、、、。

ところが、大變なところを聞かれたと思つたので、乃公におべつかといふやうなことでか、それからは乃公の方の緣談に實を入れかけて、當座のうちは、

『紅一、お前小遣がないだらう、學士ともあらうものが、常に十圓廿圓の小遣を持つてゐないと、肩身が狹いものだ！。』

と云つて、父親が呉れると、母親は母親で、

『紅一や、お前、これは小遣におし！。』

と、五圓紙幣の一枚もちよい〳〵握らして呉れる。

『宜し〳〵、こんなことなら、これからなるべく立ち聞きをすること

とにしよう。』

と、乃公は思つた。

羊羹事件

乃公は、どうも以前から、島田と云ふ髪の形は大好きだ。着物や何かばかり日本式で、頭ばかりは西洋式で、まるで、櫛や何かをかぶつたやうなは大嫌ひ、所謂ハイカラなるものは大々嫌ひだ。

十五六までなら、あの桃割と云ふやつが好きだ。

『ナニ、あなたに好かれなくつたつてよくつてよ、お氣の毒だが外にあるわ！。』

と云へばそれまでだが、何もおさしさはりにならうと思つて云ふのぢやないのだ。

只だ單に、乃公の好ききらひを云ふのだから、必ず氣にして呉れたまふな。

乃公は久振りに、飯田町の叔父さんの家に出かけた。

ところが從妹の智惠さんは、近頃お嫁入り近くなつたといふので、ハイカラにばかりしてゐたのが、近頃は島田ばかりしてゐる。

『イヨウ、智惠さん、好い格好だね。』

と、先づ第一番にひやかしてやると、

『何が……？。』

『なにがつて……島田の格好が……。』

『アラ嫌ー。』

と、顏をあからめて見せるが、どことなくうれしさうだ。

『ブヾッ、うれしいだらう、賞められて……。』

『いやよ！　ひやかしちや。』
『いや冷かすんぢやないよ、眞實さ……。』
『紅一さんは、來ると歸るまで、妾を冷かしてばかりゐるんですもの……。』
『これはおどろいた、讃辭を呈して、叱言を喰ふとは、近頃以て其の意を得ないね。』
『好いわよ、讃辭なんか呈して貰はなくつたつて！。』
『オヤ怒つた？。』
『怒りやしないわ……オホ、、、、。』
『ハ、、、、さすがは智惠さんだ。其の智惠さんの名に背かず、なか〳〵怜悧だな。たとへ心中に怒つてゐても、今おこつたところを見せると、お嫁入りの時に、何にも貰へないもんだから……。』
『アラッ……そんなことぢやなくつてよ！。』
『だが智惠さん、何をお祝ひしようね。』
と、乃公は眞面目くさつて見せる。
『妾知らないわよ。お嫁になんか行かないから。』
『ハ、、、、耻かしいもんだから、あんなことを云つてゐる。もう十日もしてごらん、山本さんの奥さんと云はれるやうになるんぢやないか、何も匿さなくつたつて好いよ……ウフ、、、。』
『また紅一さんは、いやねえ、ひやかしてばかり。』

「だつて、智惠さんが匿すから云ひたくなるんだよ。ほんとうに、何をお祝ひしようね。コーツト、さう〳〵、智惠さんは雷おこしが好きだから、あれをどつさりお祝ひしようか。」

「知りませんわ！。」

「それともキーレ紙を百袋ばかり……待て〳〵、百袋だといふと、現今紙價暴騰で、一帖あれで七錢だから七圓だな……だが仕方がない。智惠さんの一生一代只だ一遍のお祝ひなんだから、奮發するとしよう……。」

「……。」

「なぜ默つてるんだね。サア、何でもお祝ひするから、好きなもの

を云つてごらん！。」

「妾お嫁なんかに行かないから、なんにも要らなくつてよ……。」

「アツハ、、、、まだあんなことを云つてかくしてる。なぜそんなに匿すんだい。女と生れて、人の妻となり、小兒を拵へるのは、これ天からさづけられた、當然至當の職ぢやアないかね。それをしないやうな女なら、女としての資格がないんだ。」

「もうよくつてよ。そんなやかましいことなんか……。」

「ハ、、、、どうだい、降參かね。兜をお脱ぎなすつたでせう、ちよいと、島田さん、ウフ、、、、君、高島田の智惠さん。由來僕は、島田は大好きさ、島田にさうやつて智惠さんが結つてると、惚

れ〳〵するよ眞實に……いやまつたくだ。お世辭のないところだ。早くあんな牛の糞が、鍋をかぶつたやうなハイカラなんかに結はないで、そんな島田に結つて見せて呉れりや宜いに、さうすりや僕はあんなワイフなんか貰はないで、智惠さんを貰つたものに……あゝ殘念遺憾なことをしてけりだ。六日の菖蒲十日の菊、ところが其の菊の方が先きになつたんだから、僕大いに落膽だね。』

『知りませんよ……。』

ハ、、、、、智惠さんバタ〳〵一室に駈け込んでしまつた。

『フン、あれでうれしくてたまらない癖に……よし〳〵、乃公もこれから歸つて、一番妻に、智惠さん見たいな島田を結はしてやらう

……。』

と、乃公は智惠さんの家を出て、スタ〳〵歸りかけたが、待てよ。何か御機嫌とりに、妻に買つて行つてやらう、何にしやうかな。ウムさうだ、今川小路まで行つて、風月の羊羹でも買つて行つてやるとしようと、乃公は態々今川小路へ廻つて、羊羹を風月で買つて歸つて來た。

『お歸んなさい……。』

『妻、今歸つたよ。どうだ、今日は早かつたらう。』

『ほんとうにお早いわね。かう何時も早くお歸りになると、好い子ですけど……。』

ウワッ、乃公を子供扱ひにしてゐる。

『そりやア早いさ、何しろ早く歸つて、お前の顏が見たかつたんだもの……。』

『おつしやいよ……。』

『イヤほんとうだ。だから見な、ちやんとこんなおみやげまで買つて來たんだ。』

『アラ、あなた……。』

『なんだい……。』

『ほんとう……。』

『ほんとうさ、誰が可愛いお前に、嘘を云ふもんか。』

『まア、うれしいことー　して何をおみやげに買つて來て下すつたの？。』

『なにかあてゝごらん……。』

『さうねえ、ちよつと、見せて……。』

『ハ、、、、、見せたら直ぐに判るぢやないか、さうして當てゝごらんよ。』

『さうね、喰べるものなの？。』

『サアなんだかねえ……。』

『フン〈〈〈いやよ、喰べるものかさうでないかといふことだけは知らして下さらなきや。』

畜生ッ、甘つたれて、鼻を鳴らしてゐやがる。

「ハヽヽヽ、ぢやそれだけ云はう。喰べるものなんだ。」

「さう……何でせう……モナカなの……。」

「イヤ〳〵、もつとお前の好きなものだ。」

「何でせう……蒸菓子……。」

「當らない……。」

「ぢやア干葡萄？。」

「イヤ……。」

「ぢや栗饅頭……？。」

「さうでもない！。」

「ぢやア餅菓子……？。」

「なか〳〵どうして……。」

「なんでせう ねえ……ねえあなた……もう當てつこなんか宜いから、早く頂戴よう……フン〳〵〳〵。」

また鼻を鳴らす。まるで犬の子見たいな奴だ。ところが、其の犬の子見たいなところが、乃公にはうれしいのだ。

「ハヽヽヽ、まア當てゝごらんよ……。」

「フン〳〵〳〵よう……。」

と來た。

「なんだい？。」

『ぢらさないで、頂戴よう……。』
『當てなきややらないよ。當てゝ見なよ。何しろお前の一等好きなものだから……。』
『なんでせうねえ？……フン〳〵〳〵〳〵。』
妻奴、立ち上つて、乃公が持つてゐる、羊羹の包をとらうとする。
『オットどつこい、さうはさせないよ……。』
乃公が逃げ出すと、
『フン〳〵〳〵、よう、頂戴つてば、あなた……フン〳〵〳〵。』

『當てなきやなか〳〵やるもんか……。』
と、尙ほも乃公は逃げ廻つてゐると、妻はプンと怒つた顏をして、
『好いわよ。そんなに惜しいもんなら、いただかなくつたつて好いわよ……プン……。』
プンと火鉢の横に、横向きにお坐り遊ばした。
『ハヽヽヽ、そんなに怒つた風をして見せて、計略でとらうと云ふんだらうが、其の手は桑名の燒き蛤だよ。』
『否え、要りませんわ！。』
ほんとうに怒つたらしい。
『ハヽヽヽ、そら此處までお入來だ。ほら要らないか〳〵。』

乃公は包みをプラ〳〵さして見せた。

『もう要りませんわ。そんなにぢらしてからでなきや、下さることが出來ないもんでしたら、もう決していただきませんわ。どんなものだか知りませんが、妾は勝手に買つて食べますわ！。』

オホともウフとも笑つて見せない。

『オヤツ、オイ妻、小菊、ほんとに怒つたのかい、オイ〳〵、ほら上げるからお入來よ。』

乃公は直ぐそばまで行つて、見せびらかしたが、妻は見向きもしない。

『オイ、妻、ほら……さアあげるよ……お前の好きなものだよ。』

と、乃公はとう〳〵目の先きに突きつけたが、妻が知らぬ面の半兵衛さんを氣取つてござる。

サアかうなると、張り合のないことおびただしいや。乃公は拍子抜けしてしまつて、

『オイ、妻、ほんとうに怒つたのかい、ほら、あけてごらん……。』

『もう要りませんわ！。どうせ妾にやらうと思つて、買つて來なすつたんぢやないでせうから……。』

『お前にやらないで、誰れにやらうと思つて買つて來るのだ。サアとらないか、手がだるいぢやないか。』

『あなたの勝手にだるいんぢやなくつて、何も妾がさうして持つて

ゝ下さいつてたのんだ譯ぢやあるまいし。』

ウワッ、何のこつだい、本式に怒つたらしいぞ。

『イヤ、乃公が惡かつた。何も乃公は、お前を怒らさうと思つてぢらしたんぢやなかつた。サアおあがり、お前の好きな風月の羊羹だから……。』

『たとへどんな好きなものでも、要らないと云つたら要りませんよ。妾は勝手に今から行つて買つて來て食べますから……。』

妾は立ちあがつた。

ウワッ、飛んでもない、乃公は御機嫌をとるつもりだつたのに、これはなんのこつだい、反對に御機嫌をそこねてしまつて……。

『オイ、惡かつたと云つてるぢやないか、何も買ひに行かなくつたつて、乃公がお前が好きだからと思つて、態々廻り道をして、買つて來たのがあるぢやないか……、サア機嫌を直しておあがりな。』

『否え、どうか勝手にさして置いて下さい。なにもあなたのお金で買つて來るといふのではありませんわ。昨日お母さんが入らつした時に、お小遣をいただいてありますから、羊羹位は自分で買へますわ！。』

あッ、あれだから不可ないのだ。何も乃公の方で、不自由をさしてゐるんぢやあるまいし、實家の母なんかゝやつて來て、小遣なんか置いて行くから、だんだん妻の權式が高くなるのだ。いゝ年をし

て、其の位のことは分りさうなものだが、子に甘いものは仕方のないものだ。だが、羊羹を買ひにやつちや大變だと思つたから、

『そゝそりや金はあるだらうが、そんな角の立つことをしなくつたつて宜いぢやないか、サア、これをお食べよ。』

乃公は妻の肩に手をかけて、無理に其處に坐らした。

『ぢやなんですか、どうしても妾に食べてもらはなくちや、あなた氣が濟まなくつて……。』

妾に食べて貰はなくちやと來たもんだ。

『ウム、さうさ、お前に食べさせよう〳〵と思つて買つて來たんぢやないか、それをお前に怒られて、別に買ひに行かれたりなんかして、氣持の宜いことがあるもんか……。』

『ぢやア、食べてあげても宜いが、どうか食べて呉れつておたのみなさい！。』

おどろいたなどうも、これぢやアまるで主客轉倒だ。だが乃公がさう云はないと、事件がなか〳〵やかましくなるので、

『ウム〳〵〳〵たのむ〳〵。オイ妻、たのむから、どうか食べて呉れ……。』

『よろしい、それぢや折角のおたのみですから、妾いやだけど食べてあげてよ！。』

羊羹の包みを引つたくるやうにした。

ウワッ助からないなア、妾やいやだけど食べてあげてよ！だと…

…これだから妻の尻に敷かれたものは、一生頭があがらないんだ。

南無阿彌陀佛〜〜。

月給の三分の二

羊羹の包みを開けた妻は、由來何よりも好物なんだから、ニッコリ、

「あなた！。」

有り難い〳〵、羊羹の面を見て、やつと御機嫌がお直りだぞ。アッ怖かつた〳〵。

「なんだ？。」

「オホ、、、、。」

「うれしいか……。」

「うれしいわ……。」

流石は夫婦だ。妻大にこつきだ。なア、これだから夫婦の情愛なんてものは別ものだ。親子は一世夫婦は二世、三世はおろか四世五世六世、七世八世、九世十世……。

「お前が好きだと思へばこそ、態々今川小路まで行つて買つて來たのさ……。」

「さう、まア濟みませんでしたわねえ……。」

「それになんだ。今の今まで、ブン〳〵怒つてゐて……。」

「でも、あなたがいつまでも、ぢらしてばかりゐなさるから、ちよいと妾も怒つて見せたのよ。」

「エッ、ちやアほんとうに怒つたのぢアなかつたのか。」

「えゝさうですとも、可愛い妻のハズですもの、怒つてたまるもん

ですか。」
「眞實かッ……。」
「眞實だわ……。」
「お前……。」
「エ、……。」
「此方へお入來！」
乃公は妻の手をとつて、グイと引きすへた。
「あら、あなたあぶないわ！」
「大夫丈だ……。」
妻は、乃公の前にもたれて、ナイフで羊羹を切つて口に入れながら、
「あなた……。」
ムシヤ〳〵。
「ウム……甘いか……。」
「おいしいわ！　まつたく上等よ……。」
「ハ、、、、、ほんとうに甘さうだな。まつたく好きなんだ。」
「えゝ、妾大好きよ……。」
「何よりも好きか……。」
「えゝ……。」
また口に入れた。

「どうだ、かうして乃公の前にもたれて食べると、一層特別うまいだらう。」

「えゝ、でもあなたの前でなくて、羊羹の大きな塊に、かうしてよりかゝつて食べたら、どんなにおいしいかと思ひますわ。」

「オヤ〳〵、ぢや乃公よりも羊羹の方が好きなのか。」

「さうねえ……どつちかと云やア羊羹の方が好いわね……。」

これはおどろいた。怪しからん、苟くも學士の肩書を有する、此の白井紅一と云ふ、立派な良人よりも、羊羹の方が好いとは……。

「オイ〳〵、乃公と云ふ良人があるかもそ、さうしてお前の好きな羊羹でも買つて來て、喰べるしてやるんぢやないか、して見れば

羊羹よりも、乃公の方が大切でなくちゃならないんだ。」

「でも、あなたばかりあつても、羊羹がなかつたらなんにもならないわ……。」

ウワッあれだ。

「妾ねえ……。」

「なんだい？。」

「つく〳〵後悔してますの！。」

「なにを？。」

「なにをつて、學士なんて、つまらい……。」

「オイ〳〵、學士なんてつまらないとはなんだ。苟くも學士を良人

に有つてゐるお前の口から……。」

「學士を良人に有つてゐる妾の口からですからこんなことが云へますわ。でなきや、ほんとうに學士樣の奥さんになんかなつたら、どんなに結構か知れないなんて思つてゐるんでせうけれど、かうして學士の妻になつて見ると、はじめてつまらないのが判つてよ。」

「なにが爲めつまらないんだ。」

「なにが爲めつて、つまらないぢやありませんか、ですから妾つくづくさう思つてよ。」

「どう……。」

「どうつて……學士なんかの妻にならないで、どつか風月かどか、おいしい羊羹を拵へる家に嫁づけばよかつたと思ひますわ。」

喰ひ意地の張つた奴だな。

「羊羹が喰へるからか……。」

「さうよ、起きても羊羹、寢ても羊羹、始終羊羹ばかり喰べてゐられますもの……。」

「そんなに羊羹を喰つたら、食傷して死んでしまふ。」

「好いわよ。妾羊羹を喰べて死ぬんなら……。」

「羊羹と心中か……。」

「さうよ。あなたと心中ならいやですが、羊羹となら、何時でも心中してよ……。」

ウワッ、苟くも學士の價値はゼロだ。羊羹以下に見られるとは、情ないかなだ。

「そんなに好きなら、いくらでも喰べれば宜いぢやないか、何も羊羹屋に嫁に行かなくつたつて、買つて喰べたら好い……。」

「さう、うれしいわね。ぢや毎日喰べてもよくつて……？。」

「宜いとも〳〵、お前が喰べる位知れたものだ……。」

「あなた……。」

「なんだ……。」

「ぢや買つて來て頂戴な。」

「何を？。」

「羊羹を……。」

「マア、それがなくなつてからで宜いぢやないか、なくなつたらさうお言ひ、いつでも買つて來てやるから……。」

「ですから買つて來て頂戴といふのよ……御覽なさい、もうなくなつてよ。」

「エッ……。」

見るとなるほど、五十錢の羊羹を、羊羹と心中なら厭はないだの、好きだの何だのと、ペチャ〳〵喋つてゐる厭に、ペロリと喰つてしまつてゐた。

「オヤッ……。」

と、流石の乃公もおどろいた。

『何がオヤツなの？。』

と、妻は五十錢の羊羹を、ペチャ〳〵喰べりながら、ペロリ平らげてしまつて、平氣の平左でゐる。

『ウム〳〵別になんでもないが……。』

『あゝ判りました。あなた……。』

と、妻は好い工合に、乃公にもたれながら、乃公の耳をぢろゝと見あげた。

これは危險だと思つて、なるべく乃公はやさしいやうな面をして、

『なんだ？。』

『あなた、妾が羊羹を喰べてしまつたので、おどろいたんでせう……。』

『ウム〳〵、そんなことはないが、あんまり早いからな……。』

『でも、あの位の羊羹なんか、どうするだけもなくつてよ……。』

『なるほど……。』

『あれでいくらなの？。』

『五十錢だ！。』

『まあ、まや一日に二圓もあつたら、もつとは喰べたやうな氣がするかも知れませんわ！。』

『ウム、一日に二圓……。』

「それどころなすつたでせう。ですから、とても妾は、羊羹屋にお嫁にでも行かなくちゃ、自分の食慾を満足させるだけ、喰べることは出來ないといふんでございますわ―。」

「いくらお前が好きでも、一日に二圓づゝの羊羹を喰ふなんて、それこそ胃を損ねてしまふ。」

「よくつてよ。胃なんかいくつもこねたつて……。」

オヤ〳〵、乃公の妻は、胃袋なんか、いくつも持つてゐると見える。

「だが、それや毒だよ……。」

「よくつてよ、毒でも、妾先刺から毒つてる事分かくつて、羊羹を

喰べて死ぬんでしたら、本望ですわ。」

「おどろいたなどうも……。」

「あなた、びつくりなすつたでせう……。」

「イヤ、乃公ゃ、いくらお前が羊羹が好きだからつて、まさか一日二圓の羊羹を喰はふとは思はなかつた。」

「ちやなんですわね。喰べさせるのが惜しいんですあね。」

「馬……馬鹿なことを云へ、一日二圓喰はふと三圓喰はうと、喰べさせるのが惜しいことはないが、そんなに喰べては、お前のかちだによくないから云ふのだよ。」

「ちや、喰べさして下さるの？　一日二圓づゝを我慢しますわ…。」

「ウム、よし〜。」
「眞實なの？。」
「眞實さ……。」
「マアうれしいわね……。」
「痛ッ……うれしいと云つて、つねる奴があるか。」
「でも、惡ふて此の手が當てられようか。」
「ぢやいたくない〜。」
「アタ、いたくない〜ぢや張り合ひがなくつまらぬ。」
「ぢやどうすれば張り合ひがあるんだい？。」
「痛い〜と云つて、大きな聲で泣くんですよ。」

「馬鹿ッ……。」
飽くまでも子供扱ひだ。
「あなた、サア買つて來て頂戴！。」
「今か……。」
「さうよ……。」
「今五十錢、一人でペロリと喰べたばかりだから、もうちよつとしてからで宜いだらう。」
「いやよ……。」
「だつて毒だ……。」
「毒でも宜いわ！　今度は西瓜ですから、二三個だけ買つて來らつ

しやいよ……。」

「ウム〳〵。」

『サア、早く行つてらつしやい。』

「ウム……。」

『早くさ……。』

『行つて來るよ……。』

『なにを思圖々々してらつしやるの？』

フン、宜い加減に思圖々々したからうぢやないか。

すると妻は、また乃公の面をぢろりと見上げて、

『あなたッ……。』

と來た。而かもたッと語尾に力がこもつてゐたのは、なか〳〵以て

おだやかでない。

「ウム……。」

『ウムぢやなくつてよ。早く買つて來て頂戴よ。』

『ウム、買つて來るよ。』

『あなた、惜しくつて……。』

「惜しいことがあるものか、可愛いお前のためだもの。」

『ぢや、早く行つて來て頂戴、其の代り、お歸りになると、うんと

可愛がつてあげてよ……。』

『眞實か……。』

「眞實ですとも……そして、早くから寢ましてあげてよ。かまふものですか、電氣がつかないうちだつて……。」

「ウム〳〵〳〵。」

「アラッ、アヽきたない。イヤッあなた。ウム〳〵〳〵なんて、妾の面に、涎を垂らしちゃ……あッきたない……。」

「涎ぢやない！。」

「ぢやアなんなの？。」

「ウム〳〵〳〵その唾さ……。」

「同じぢやなくつて、サア、ぢゃ早く行つてらつしやい。」

「ウム、行つて來るよ。」

「行つてらつしやい。」

「ぢゃ退け……。」

乃公は立たうとするも

「あたし、買つて來て貰ひたいのは貰ひたいが、外に出すのが心配よ。」

「なぜ……。」

「でもあなた、他の美しい女に、とられはしないかと思つて……大切なあなたを……。」

ウフ……うれしいな

「大丈夫だよ。そんなことはないから。どんな誘惑の手をのばさう

とも、お前といふ、可愛いワイフがある上は、いつかなびくもんか。」

「ほんとうなの？。」

「ほんとうさ。」

「うれしいわ！。」

「サア買つて來てやるぞ。」

「でも、放しともないが、仕方がありませんから、早く買つて來てちやうだい。」

と、ワイフは乃公の前から起き上る。

「ウム、最大急行で行つて來る。」

「さう、うれしいわね、したら直ぐ寢ませてね。」

「ウム、だがなんだな、晩飯の仕度をして置けよ。」

「宜いぢやなくつて、御飯なんかは、床の中に入つて、羊羹を喰べて、間に合はしませうよ。」

おどろいたなどうも、いくら米が高くつても、羊羹を喰つてゐられるもんか、それもそこらの、芋羊羹か蒸羊羹位ならとも角も、いやしくも藤村の羊羹だ。却つて飯よりも高いものになつてしまふ。

乃公は又飛び出した、電車に乘つたが、

「なんのこつだい、とう〳〵おだてられて、羊羹を買ひにやらされるのか、だが、あゝして甘へられると、憎くはないからな。よしよ

し、同じ買つて行つてやるなら、帳場を延ばして、藤村まで行つてやれ。」

と、遂々本郷の藤村に行つて、

「オイ、羊羹を呉れ給へー。」

「入らつしやい、羊羹を……いかほど差し上げませう……。」

「さうだな、二圓ばかりで宜いだらう。」

「畏まりました。おつかひものになさいますか、それともお送りになりますか？。」

「ナニ、妻に喰べさせるんだ……。」

アッ、しまつた。苟しくも學士樣たるものが、羊羹を買ひに行つて、妻に喰べさせるなんて、餘計なつまらないことを云つてしまつたと、後悔してもあとの祭。

「では、別にお箱に入れませんでも……。」

「あゝ宜いとも〳〵。」

「畏まりました……。」

しばらく待つてゐると、

「どうもお待ち遠さまで……。」

ちやんと包んで呉れた。

「君、なんだつたら配達もして呉れるだらうね。」

「ハイ、御配達も致しますが、どちら樣で……。」

『ウム、麹町だが、何しろ僕の妻は、君のところの羊羹でなくちゃ決して他のは喰はないんだ。

『よほどお好きでゐらつしやると見えまして……。』

『ウム、一日に二圓づゝ位は喰ふね……。』

『アハ、、、、まさか、いくらお好きでも……。』

ウワッ大變だ。なんだつて乃公はこんなに口が輕いんだらう。何も妻が二圓の羊羹を喰ふなんて、よくもペラポーなことが、他人の前で云へたもんだ。

見ろ、他の客も笑つてるぢやないか、もう此の店に來られやしない。

乃公は急にはづかしくなつたので、二圓の金を拂ふが否や、藤村を飛び出して、

『ウフ、、、、サア此の羊羹を投げ出したら、妻がどんなに喜ぶだらう……早く喜ばしてやりたいなア……オヤ〳〵、電車がなか〳〵來ないなア、一體何をしてるんだらう。大體運轉車臺が少な過ぎるんだ。』

と、氣をあせつて待つてゐるが、なか〳〵電車はやつて來ない。

『これはおどろいた。どうしたといふんだらうなア……。』

そのうちに、やつとやつて來た。ヒラリと飛び乘る。おそいなア電車が、なんだつて今日の電車に限つて、こんなにおそいんだらう

……？

氣が氣ちやない。

「だが待てよ。これで今日は羊羹代だけが二圓五十錢、妻は毎日二圓づゝの羊羹を喰ふと云ふ、して見ると、月に積るな、六十圓、大の月は六十二圓だ。ウワッ、すると乃公の俸給の三分の二は、羊羹代になつてしまふわけだな、助けて呉れ、やり切れたもんぢやない。いくら可愛がつて貰つたつて、喰はずにはゐられない。」

と、冷靜に考へると、急に二圓も羊羹を買つたのが惜しくなつて、二圓の羊羹の包みを眺めて、ホロリと泪を落した。

止せよ、見つともない、電車の中でなんか泣かなくつたつて、は

じめから判つてるぢやないか、何も今更ら泣く位なら、初めから買ひに行かなけりや宜いのだ。

「買つて來た以上は、女々しいことを云ふな、男の、而かも學士樣の體面にかかはるぞッ、馬鹿ッ、妻の前で、泣きつ面なんかして見ろ、一遍に心を見られてしまふぞ……。」

と、自分で自分の心を叱りながら、やがて自分の家の玄關の格子をガラリ、チリン〳〵。

「どなた……？。」

「乃公だよ……。」

「マアあなた、隨分遲かつたわねえ。」

『ウム、折角ならばと思つて、藤村まで行つて來たんだもの……。』

『なんですつて……羊羹買ひをかこつけに、また行つてらつしたでせう。』

『どこへ？。』

『どこへつて、カフエーに……。』

『馬鹿なことを云へ……本郷の藤村に行つて、此の通り、羊羹を買つて直ぐ歸つて來たばかりぢやないか。』

『さう……ぢやちよつと臭はしてごらんなさい。』

と、妻は乃公の息を臭ひやがる。

フン、まるで犬見たいな奴だ。

そして、乃公が酒臭い息をしてゐないもんだから、やつと氣が濟んだと云ふ風に、

『許してあげてよ……。』

ウエッ、やり切れないなア、態々本郷の藤村まで、羊羹を二圓買ひに行つて、歸つて來ると、カフエーによつて來たらうと云はれて息の香を臭がれた上、許してあげてよと來た。

だがまてよ。さうして臭れるだけ、乃公を思つてるからなんだな、ウフ、、、、うれしいなア……。

『あなた！。』

『なんだ？。』

『いくら買つて入り申して……？』
『二圓だけ買つて來たよ。』
『あら、たつた……。』
ウワッ助けて呉れ。もうこれで今日は二圓五十錢ぢやないか、二圓でも毎日喰はれて見ろ、一ケ月につもると、乃公の月給の三分の二は喰つてしまふ勘定になるんだ。
『なくなつたら又買つて來てやるよ……。』
『マア、うれしいわね……。』
妻は、羊羹の包を引きよせて、それを解くと、
『あなたー。』

『なんだ？。』
『妾、またきつのやうにして喰べてよ。よくつて？。』
『乃公の前にもたれてか？。』
『さうよ。』
『宜いとも……。』
『マアうれしいこと！。』
妻は乃公の前にもたれて、自分で切つて喰つてゐたが、
『あなたー。』
『なんだい？。』
『妾が自分でかうして切つて喰べるよりも、あなたにきつて貰つた

方が、おいしさうですから、切つて頂戴な。』

『ウム、よし〳〵。』

乃公はナイフで羊羹を切つてやると、

『アラ、いやよ！。』

『なにが？。』

『なにが？ちやなくつてよ。喰べさして頂戴よ。』

『かうしてか……あゝんおしよ！。』

乃公はつま楊子で、羊羹の切片を喰べさしてやる。

『どうだ、うまいか？。』

『おいしいわ、そりや、なんとも云へませんわ！。』

喰ひ意地の張つたやつだ。あなた一片召しあがつてごらんなさいとも云はない。

『ねえちよいと……。』

『なんだい……？。』

『でもお酒なんか飲むよりも、どれだけ好いか知れないわねえ…。』

『あゝ、女の酒飲みと來たらやり切れないね。』

『さうでせう、して見りや、妾なんか、羊羹の方だから、あなたうれしいでせう。』

ウエッ、うれしいでせうだと、あんまりうれしいことがあるもんか、毎日二圓づゝの羊羹を食ふと云ふに至つては、經濟上の問題か

ら云ふと、酒飲み以上だ。現に乃公の俸給の三分の二以上をペロペロやつてしまふんぢやないか……。

『アラ、なぜ默つてゐらつしやるの？　うれしかなくつて……？お困りなの？。』

『ウム〳〵〳〵うれしいさ……。』

フン、世話アねえや。膝にもたれさして、つま楊子で、月給の三分の二を、かうして食はしてやりやア……。

『だがなア……。』

『エ、……。』

『お前ほど羊羹好きなものは、恐らく他にあるまいねえ。』

『さうでせうか……。』

『さうでせうかつて、何しろ一日に二圓づゝの羊羹を食ふものが、どこにあるものか。』

『さうねえ……。』

『藤村の番頭も、おどろいてゐたよ。』

『エッ、なんですつて……あなたそんなことを、藤村でおつしやつたんですか……。』

しまつた。遂ひ口がすべつちやつた。

『ウム言ひはしないが……。』

『云はないものが、藤村の番頭がおどろく譯がないぢやありません

か、あなた、そんな馬鹿なことをおつしやつたでせう……サア云つたなら云つたと、眞直ぐに云つてごらんなさい……。』

パッと妻は起きあがつた。

ウワッ、これはあぶない。

『ウム〳〵さうとは云はないが……。』

『ぢや、あなたがおつしやらないのに、先方から、どう云ふ譯でおどろいたんです？。』

『ウム〳〵それは何さ、事に依ると、毎日配達してもらいたいが、配達するかと聞いたら、配達は致しますが、あなたの奥さんは、よほどお羊羹がお好きでゐらつしやると見える。めつたにございませんよと云つたんだよ。』

『おつしやいよ。ただ配達してもらひたいがとおつしやつたばかりで、妾が羊羹が好きだと云ふことが、先方へどうして分ります。あなたがおつしやつたからでせう……否え、そりやなんと云つても、おつしやつたからですわ。』

『云ふのは云つたさ……。』

『なんとおつしやいました？。』

『ウム〳〵。』

『ウム〳〵ぢやありませんよ。さアなんとおつしやいました。』

『ウムそのなにさ、よほどお好きの方かと云ふから、ウム、乃公の

妻は、君のところの羊羹でなくちゃ食はないんだ、一日に……その……。』

『エッ……。』

『その……一日に二圓づゝ位は食ふと云つたよ。』

『馬鹿ッ……。』

これはおどろいた。良人の學士樣をとらへて、頭から馬鹿ッと來たもんだ。こんな妻にかゝつちや、學士樣もヘナチョコ同樣、些かも値打がない。

乃公はプル〳〵ッと慄へあがつた。

『あなたは、あなたは……。』

『ウム〳〵〳〵。』

『ウム〳〵〳〵ぢやありません。なんでそんな馬鹿なことをおつしやるでせうね。』

『ウム〳〵その別に、云ふつもりぢやなかつたんだが、遂ひそのなんだ。』

『遂ひそのどうしました。そんなことを閉きましたか。』

『ウム〳〵聞きはしないが、遂ひその口が辷つたもんだから……。』

『いくら口が辷つたからつて、乃公の妻は、一日に二圓づゝも羊羹を食ふなんて、そんな馬鹿なことを云ふ人がありますか、いくらなんでも、二圓づゝの羊羹を食べるものがありますか。』

『あるぢやないか、お前は毎日二圓づゝ食ふと云つてるぢやないか……。』

『エ、妾は食べますが、他にめつたにありやしませんわ！　まあなんと云ふ妻君だらうと、笑はれるぢやありませんか……。』

フン、笑はれるやうなことなら、そんなに食はなけりやア宜いに勝手なことを云ふ奴だ。

『笑つてゐたでせう……。』

『ウム、番頭が、まさか、いくらお好きでもと云つて笑つたよ。』

『さうでせう、ほんとうに、なんて馬鹿でせうねえ。』

『かまはないぢやないか、何處の誰れだか、分りやアしまいし……

もうあの家に買ひに行かなけりやア宜いんだ……。』

『いくら何處の誰れだか判らなかつたにしろ、そんな馬鹿なことを云ふ人がありますか、あなたなんか、何處に行つて、どんなことをおつしやるか知れたもんぢやないわ。』

ア、よかつた。大分火の手がおさまつて來た。初め馬鹿又と來たときには、まアどうなることかと、流石の乃公も蒼くなつたが、これでやつと安心。

『あなた！。』

と來たぞ……フ、うれしいな。ヤレ〳〵。

『もう寢みませうか……。』

『寢るのは宜いが、夕飯はどうしたんだい。』

『でも、妾羊羹でお腹一ぱいですもの……。』

助からんなア、自分は羊羹の一圓近くも食つたんだから、腹一ぱいか知れないが、此方は一度歸つて來て、また本郷まで行つて、羊羹を買つて來て、僅かに五六斤を口にしたまでだ。飯を食はずに、ペコ〳〵の腹をかかえて寢られるものか。

『お前は腹一ぱいでも、乃公はどうする……。』

『さうねえ……あなたお腹空いて?。』

『空いてるともさ、ペコ〳〵だよ。』

『ア、、厄介だわねえ。』

これは恐縮。

『なんだか、かうお腹がくちくなると、動くのがおつくうですわ!。』

オヤ〳〵、月給の三分の二を食はれて、乃公に飯の仕度をして呉れるのもおつくうだと來られては、良人の光いづれにありやだ。

『おつくうだらうが、賴むから仕度をして呉れ!。』

『仕方がないわ、妻のつとめですものねえ……。』

ウフ、、、これでも妻のつとめだけは忘れないぞ。

『さうだとも……。』

『豪さうにおつしやいよ……。』

『ちつとも豪くはございません……。』
『あなた！。』
『ウム……。』
『なんで召しあがつて？。』
フン、やさしいなア……。
『さうだな、なんでも宜いよ……。』
『何でも宜いよつて、なんにしませうねえ……。』
『お前が見たてゝ呉れるものなら、なんでも食べるよ。』
『さう……ぢやおさしみでもさう云つてやりませうか……。』
『それでも宜いね。』

『それとも、烏賊の酢味噌か何ぞにしませうか。』
『ウム、それもよからう……。』
『鮑も宜いわねえ。』
『ウム……。』
『鮒のいらひもおいしいわね。』
『宜いねえ……だが面倒だよ。』
『ナニ、譯はありませんけど……それとも、フライか何かしてあげませうか……。』
『厄介だらう……。』
『ちつとも厄介なことはありませんわ……でもしつこいでせうし

ねえ……。』

『なんでも宜いぢやないか。』

『それとも、何か煮肴にしませうか……。』

『ウム……それも宜いだらう。』

『はて何にしませうねえ……。』

『なんでもいゝよ。お前の手數のかゝらないもの……。』

『さうですねえ。もう面倒ですから、あるもので召しあがつてゐらつしやいよ。』

『ウム、何があるんだい？。』

『今朝のお大根の煮たのが五ッ片ほど殘つてますから、あれで召し

あがつてらつしやいよ。』

これはおどろいた。散々うまいものの名前ばかり聞かした揚句、今朝の殘りの、大根の煮しめ五ッ片で、飯を食へとは胴慾な、そりや聞えませぬ妻どのだ。

『イケなくつて？。』

イケないなどゝ云はうものなら、又馬鹿ッと來るかも知れないので、

『イケないことはないが……。』

『ぢやお大根とお葉漬けがありますから、あれで召し上つてらつしやいよ。ねえ、物價騰貴の今日ですもの、さう贅澤をおつしやらな

いで……。』

フン、物價騰貴の今日に、羊羹の一圓もペロリと食てしまつて、物價騰貴の今日だから、良人に大根の煮しめの殘りと、葉漬で夕飯を食はして置かうと云ふのだから、有り難いものだ。

妻は飯臺を持ち出して、それでも飯だけはよそつて呉れた。

『さア、あなたお召んなさい！　今日はこれで我慢してゐらつしやいよ、今度、妾のお腹が空いてるときに、何かおいしいものをしませうねえ。』

ウエッ、あれだもの、自分がお腹が空いてゐないので、良人に大根と葉漬で食はして置いて、今度自分のお腹が空いてるときに、お

いしいものをしようと云ふのだから、勝手なものだ。

あゝやり切れない〳〵。

乃公はやつとのことで、飯を食つてしまふと、

『あなた！。』

『なんだ？。』

『やすみませうね。』

『ウム……。』

『イヤ……？。』

『イヤなことがあるもんか。』

『ぢややすみませうね。でもあんまり早いと、なか〳〵眠れません

から、濟みませんが、妾宜い加減に眠たくなるまで、肩を叩いてちやうだいねえ……。」

オヤ〳〵ッ、まだ此の上、肩を叩かされるのかなア、虐待〳〵。早く寝よう〳〵と云つて、どうもをかしいと思つてゐた……。

「おいやなの？。」

「いやなことはないが……。」

「ちや叩いてちやうだいね……。」

床を敷いて、俯伏して寝ると、乃公は起きてゐて、妻の肩を叩く。

「あなた……。」

「ウム……。」

「濟みませんわねえ……。」

「なアに……。」

「もう肩はいゝから、今度は腰を少しばかり揉んでちやうだい…。」

「ウム……。」

「濟みませんわねえ……。」

「ナアに……。」

「あゝ快い氣持だわ……もつと力を入れてもよくつてよ……。」

其方は力を入れてもよくつてか知らないが、此方はなか〳〵手がつかれて、入れようにも力が入らないんだ。

「ほんとにすみませんわねえ……。」

『どうだ、もういゝか……。』

『エ、、もうちよつとよ……。』

オヤ〳〵。

『どうだ？。』

『エ、、もう腰はいゝから、今度は脚を擦つてちやうだいな。』

ウエッ、今度は脚か、一體全體、乃公は何時になつたら、放免になるんだらう……。

今度はおみ脚を擦り奉る。

『どうだ……？。』

『快い氣持よ！。』

アッあれだもの……なか〳〵ちよつとのことぢや、放免になりさうもないなア……。

鬼母王佛頌

乃公は或る時だつた。巣鴨まで用があつて、巣鴨行きの電車に乘つた。

ところが、其の歸り、夜だ。電車の中に、二人の島田が乘つて居た。一人は十七八、一人は二十二三、共にちよつと踏める美だ。云はずと知れた、藝者だ。

乃公は學士樣だ。學士樣に違ひはない。決していかものぢやない。確かにまがふ方ない學士樣だが、まだお耻かしいながらだ。藝者を買つたことがないのだ。

笑つて呉れ給ふな、まつたくないんだ。死ぬまで一度は買つて見たいと思つてゐる——オイ〳〵情ないことを云ふなつて——そりや

先きになつたら、藝者買ひの專門家になるかも知れないが、現在に於ては、まつたく實際、正直かけ値のないところが、さう思つてゐるのだ。

待てよ。幸ひ其の藝者たちは立つてゐる。そして其の横の吊り革が明いてゐるから、あすこに一番行つてやらう——と、乃公はツカ〳〵と其の傍へ行つて、直ぐ隣の吊り革にブラ下つた。

藝者たちは、どこできこしめして來たのか、ほんのりと頬に紅潮を呈して、些か御酩酊の氣味だ。

「さうよ、でもあたしあんな人はきらひよ。」

と、十七八のが云ふと、

『妾だつていやだわ……妙にお金持ちつてな風をしてねえ……。』

と二十二三のが云ふ。

『お金がなくつたつて、あたしあいさん見たいな人が好きよ。』

『ほんとうよ。現在お金がなくつたつて、今にどんなに偉い人になるか知れやしませんものね……ちよいと……惚れるなら陸海軍の軍人よりも、學校通ひの書生さん、末は博士かね、大臣か、國會議員がたのもしやッてね……オホ、、、、。』

『まつたくよ。でも電車の車掌や運轉手ぢやつまらないわね。』

『ちよいと……怒つてよ……。』

『オホ、、、、さうだつたわねえ……妾何の氣なしに云つてたのよ

他の乘客の前も憚からず、好きだの嫌ひだのと、男の噂。而かも二十二三の方のお召の羽織は、右の肩から辷り落ちさうになつてゐるが、本人は一向頓着しない。

そのうちに、電車が白山の上のカーブを曲る拍子に、ヨロ〳〵ッとして、乃公にぶつつかつた。

『アラ御免なさい……オホ、、、、。』

『どう致しまして……。』

と、云つてしまつて氣がついた。馬鹿だな乃公は……と、乘客は、みんな乃公の顏を見てクス〳〵笑つてゐる。

けれども、乃公は此の藝妓に、ぶつつかられても、決して不快で

はなかつた。

まつたくどう致しましては、乃公の眞底から出た言葉なんだ。これが男同志なら、

『氣をつけろ……。』

とか、足を踏みもしないのに、

『ア痛ッ……。』

と云ふのだが、實は好んで傍によつた位の乃公だ。しかも電車が搖れるたびに、そつとかう乃公の身體に、奴の身體がふれるのが、何となく愉快で、なんだかうそゝのかれるやうで、なるべくさはつて呉れれば好いと思つてゐたところだから、

『よくぶつかつて呉れました。』

と、心中大いに感謝してゐた位なんだ。

此の時は、乃公は寧そ電車に吊り革がなかつたらと思つた。吊り革でもなければ、

『アレッ……。』

とか何とか云つて、乃公に抱きついたらうものに……オットどつこい、あんまりこんなことばかり云つてると、若しか出齒龜のやうな事件でもあつて、其の犯人でも判らないと、早速嫌疑者として引致されなくちやならないぞ……。

乃公は乘客から面を見られてもかまはない、もう一度、烈しく

ぶつつかつて呉れれば宜いがと思つてあたが、生憎く電車がひどく搖れない。しかし、指ケ谷町でとまる時にはと思つてゐたが、やんはりとまつたから、ヨロ〳〵と來なかつた。

『あゝつまらない、今度は掃除町だ。オイ運轉手、いつもなら、急に止めたり、烈しく出したりするのを怒る乃公だが、今日だけは、なるべく烈しく止めたり出したりして呉れ、なんならかう人でも轢かれさうになれば宜いがな、さうすると急にとめるから、乃公にどんとぶつつかるに違ひない……。』

と思つてゐると、今度もまたやんはり。

『何の事たい……。』

と思ふまもなく、

『おりますよ……。』

『ちよいとおりてよ！。』

と云つて、二人は人を押し分けて、前の方へ行つた。

乃公は此處で別れるのが、なんだかう物足りなく思つた。それにあの二十二三の方の羽織が、肩から滑り落ちさうになつてゐるから、あれを一つ注意してやつて、大いに乃公の親切振りを見せてやらうと思つたので、乃公は神保町乘換への、新宿ゆきの切符を持つてゐるにも不拘、後部の方から、そゝくさと降りた。

と見ると、藝妓二人は、かね萬ときわの間に入つた。

『ハハア、白山藝妓だな。』

と思ひながら、乃公も其のあとから曲つたが、言葉をかけようと思つても、なか〳〵急に出ない。

『止さうかな。』

とも思つたが、折角切符を無効にしてまで、此處で降りたんだから、

と、勇氣を出して、

『オイ君々……。』

と云ふと、

『……。』

二人はびつくりして振りかへつた。

乃公は透かさず、

『君の羽織は、肩から滑り落ちさうになつてゐるよ。注意したまへ……。』

と、やつとのことでこれだけ云ふと、

『さうですか、ちよいと、これが粹なところよ……どうも憚かりさま……。』

と歩き出した。

乃公は進むことも出來ない。と云つて急に曲らうにも横町はなし。

『ちよいと姐さん、なんでせう。隨分野暮な男ねえ。髯なんかばか

し生やしてゐたつて……。』

と、十七八のが云ふと、二十二三のが、

『なんだか、今の男は妾の側に乗つてゐた男よ。』

と云ふと、

『アッさう〳〵。あれよ、でも神保町乗りかへで、新宿行きを切らしてゐてよ……それにおかしいわねえ。』

『さう……きつと高等出齒龜か知れないわ……オ、ッ怖ッ……。』

キャッ〳〵云つて、二人は駈けて行つた。

ウワッおどろいた。高等出齒龜とは、乃公はこんなはづかしいことは、生れてからはじめてだ。人でも聞いてゐやしなかつたかと、

ぢつと四邊を見廻したが、幸ひなるかな、別に人も見えなかつたので、ヤレ〳〵とホッと一息、急いで元の電車通りに出たが、顏はポッ〳〵とほてる。

『あゝ何のこつたい……此方は親切なつもりで、態々乗換切符を無効にしてまで知らしてやつたのに、野暮な男と云はれたり、高等出齒龜と云はれたり、あゝつまらない〳〵、これからは、決してこんな親切心を起すものぢやない。苟くも銀時計組の一人が、野暮な男までは尙ほ忍ぶとしても、高等出齒龜と云はれたに至つては、此の上もない耻辱なんだ。』

扨て扨て藝者なぞといふものは、人間並の人情なんぞを解した奴

等ではないわい……と、かう思ひながら電車に乗ると、また中央のところに、島田に結つた、藝妓らしい女が三人乗つてゐたが、

『桑原〳〵〳〵。』

で、乃公は隅の方に小さくなつてゐた。

すると、其の藝妓どもは、水道橋で降りたが、大方神樂坂あたりの藝妓だらうと、窓の硝子戸越しに、

『あゝ、やつぱり、島田姿は好いもんだなア……。』

と、見惚れてゐると、同時に電車が搖ぎ出したので、額を硝子にポカリ、

『ア痛ッ……亂暴な運轉手だな……。』

フン、先刻はなるべく亂暴にと云つた乃公が、同じ口から、今度は亂暴なと憤慨してゐる。

乃公ばかりぢやない。世の中のものは、みんながこんなもんだらう……。

島田封じ

或る日のことだ。

『オイ、ワイフ……。』

と、乃公は呼んだ。

『なんですの？。』

『過日、飯田町の叔父さんところに行つたら、智惠さんがね、近頃はもう嫁入り前なもんだから、島田を結つてゐるが、まるで顔の格好が違つたよ。』

『さうでせうね。あの人は、お似合ひになるでせう……きつと……。』

『ウム、よく似合つてる！　まるで見ちがへるやうだ、あの牛の糞見たいな、ハイカラの時なんか、ほんとうにチンクシャ見たいで、

頭と面の長さが同じで、見られたざまぢやなかつたが、どうも今度は、素的な美人になつて居るよ。あれなら乃公でも滿更ら……アッムニャ〳〵〳〵。』

『なんですつて、乃公でも滿更らなんですつて……其の次ぎをおつしやいよ。』

『ナアニ、なんでもないがね。』

『それでどうしたとおつしやるんです！。』

『どうも、乃公は由來島田が好きさ。お前だつて、初めて乃公と會つた時は、島田だつたらう。其の時に、あゝどうも美人だなア、これなら學士たる、乃公の妻にしても耻かしくないぞと、一遍に惚れ

込んでしまつたんだ。あの見會の時にさ……。』

『おだてなすつちやいけませんよ……御自分で、何か島田の事を思ひ出したもんだから……。』

『否や、そんなことはないよ、おだてるんぢやないが、ほんとうだ。それでぞつ込んぼれ込んで……。』

『もう結構よ……。』

『マア聞いて呉れ、ほんとうに、おだてたりなんかするんぢやないから、それでいよ〳〵貰ふことになつて、お前が乃公のところへ、はじめて來た姿を見ると、矢張り島田なんだらう……ウフ、、、。』

『なんですね。宜い加減に馬鹿にしてゐらつしやいよ。』

『馬鹿に誰れがした。』

『でも、妙に、ウフ、、、、なんて、をかしな笑ひ方をなすつて……。』

『をかしな笑ひ方ぢやないんだ。これはうれしいからなんだ。あの晩のことを思ひ出して……ウフ、、、、。』

『まるで氣狂見たいな方ね。』

コレハおどろいた。狂氣見たいとは、これでも正氣の學士樣だぞ。

『あの晩お前が、島田に結つてさ、はづかしいもんだから、ウフ、、、、。』

『いやよ、あなた、氣味が惡いわ。』

『大丈夫だよ。取つて食やしないよ……眞紅な顔をしてさ……へ、、、、三々九度の盃……ウフ、、、、。』

『ほんとにあなたはどうか爲すつたのねえ。』

『マア聞け、どうもしない。それからお床入りつてな順序だつたな。』

『あなた、宜い加減になさいよ。そんな馬鹿見たいなことばかり。』

『コレハしたり、馬鹿見たいなことと云ふやつがあるか、抑も二人が夫婦になつた、第一夜の追憶ぢやないか。なつかしい、華やかな、愉快な、終生、忘れんとして忘るべからざる、其のなんぢやないか、それを馬鹿見たいなことゝは怪しからん……。』

『そんなことをおつしやつて、何になりますね。』

『イヤ、別に何になるといふ譯ではないが、あの時お前は島田で來たな……。』

『そんなことは判つてるぢやありませんか。』

『あの時の島田姿は、どうも何とも云へなかつたね。かうして、あの時のことを考へると、お前のあの時の島田の姿が、チラ〳〵と眼の前に、幻のやうに浮んで來るよ……アッたまらない。』

『あなた……。』

『なんだい？。』

『しつかりなすつて下さいよ。』

『なにを……。』

『なにをぢやありませんわ。ほんとうにあなたどうかなすつたのね え。』

『乃公がどかなすつたとは……。』

『そんなにおつしやるところは、滿更ら氣が違つたやうでもないが ……。』

『馬鹿なことを云へ、誰れが氣が違つた？　まつたくあの時のお前の島田姿を、今幻に見てゐるんだ。』

『もう判りましたよ。』

『判つたか、判つたら、早く髮結に來るやうに云つてやれ……。』

『判つたら髮結に來るやうにつて、髮結を呼んでどうなるの？。』

『アッ、ぢやまだ判つてゐないんだな。』

『何が判つてゐないんだとおつしやるんですよ。』

『判らないなア、あの時の島田姿は、たまらなくよかつたといふのさ……だから判つたらう。』

『それならそれで宜いぢやありませんか、さういつまでも、同じことを繰返してゐらつしやらないでも……。』

『こりやおどろいた、乃公と結婚をして、新婚旅行などをした時には、あゝのどがと云ふと、あなたサイダを買ひませうと云ふ位、氣轉が利いてゐたのに、僅かに一年を出ですして、既に其の氣轉は失

せてしまつて、耄碌するとはおどろいた。』

『なんですつて、妾がどうして氣轉が利きません。妾見たいな、氣轉の利いたものが、他にありますか、かう云つちやなんですか、あなたのためには、世界に又と一人ありやしませんよ。』

あなたのためには、世界に又と一人はおどろいたな。

『でも、乃公が先刻から、あんなに云つてるのが、判らないとあれば、氣轉が利かないと云はねばならんぢやないか……。』

『どう氣轉を利かすんですよ。』

『馬鹿だなア、どう氣轉を利かすんですよなんて、そんなことを聞いてからするやうぢや、氣轉といふものぢやないぢやないか……あ

ゝぢれつたいなア……。』

『マアおかしいわねえ……。』

『まだ判らないのか、あのなの、結婚當夜のお前の島田の姿が、乃公は無上に氣に入つたといふのさ。』

『それならそれで宜いぢやありませんか。』

『ウワッ、あれだのも、だから氣轉が利かないといふんだ。』

『だつてあなた。あなたもあなたぢやありませんか、結婚當夜の、妾の島田姿が氣に入つたとばかりおつしやつて、氣轉が利かないく つておつしやるけど、氣轉の利かせやうがないではありませんか。』

『それだから困つちまう。あの時の姿を、幻に見てゐるんだ。』

『さうですか……。』

『オイ〳〵、さうですかぢやないよ。』

『でも、さうですかといふより外に、云ひやうがないぢやございませんか。』

『もう一度、あんな島田姿を見たいといふのさ。』

『さう?。』

『さうだ……。』

『でも……。』

『でもぢやないよ。見たいといふんだよ。』

『でも仕方がないぢやございませんか。』

『アッあれだ。仕方がないぢやありませんかぢやないよ。だからさ……髪結を呼んで來いと云ふのさ、判らないのか……。』

『髪結を呼んで來て、どうなさるんです!。』

『あゝぢれつたいなア……。』

『どつちがぢれつたいか知れやしませんわ。判らない〳〵、氣轉が利かないつて、なんのことだか、ちつとも判りやしませんもの…。』

『オイ〳〵、髪結を呼んで來て、あの時のやうな島田を結へと云ふんだよ……。』

『阿呆ッ……。』

ウッッおどろいた。而かも天地にとどろく大音聲で、阿呆ッと來たぞ。

乃公は思はず悚みあがつた。

そして、次ぎに落ちて來るのは、百雷か千雷かと、おつかなびつくり。

『マアあんて馬鹿なんでせう……。』

オヤ〳〵、阿呆で馬鹿か、して見ると、なか〳〵念が入つてる譯なんだな。お誂へか何かなら、極く入念で結構だが、こんな入念は根つから感心しないなア。

『馬鹿野郎ッ……。』

と來た。

オヤ〳〵、念には念を入れるつもりだ。賢人は、石橋を叩いて渡ると云ふ、露西亞の格言式かな。

『ほんとうに〳〵、あなたは……。』

オヤ〳〵、どこもここも、なか〳〵一遍ぢや濟まない念の入れ方だ。

『おれはおれは……。』

と、乃公もちよいと混ぜつ返して見た。

『阿呆ッ……。』

オヤッ、また阿呆が落ちたぞ。

『へイ……。』

『へイぢやないわよ。混せつ返さないで、默つてゐらつしやいよ。』

『ハイ〳〵。』

『ハイ〳〵ぢやないわよ。』

『ウム……。』

『默つてらつしやいといふに……。』

『だから返事をしてるんぢやないか。』

『返事なんかなさらなくつたつていゝわ！　あなた、妾に、島田を結へと云ふんでせう……。』

『……。』

『ちよいと……。』

『なんだい？。』

『なんだいぢやなくつてよ。妾が聞いてますのに、なぜあなたは答辯なさらないんです？。』

答辯と來たぞ、ちと事件がやかましくなつて來た。

『だつて、返事なんかしなくつて宜いと云つたぢやないか……。』

『先刻のやうな、ハイ〳〵だの、へイ〳〵だのと、あんな人をお茶らかすやうな返事はしなくつても好いと云つたのよ……。』

『オヤさうかへ？。』

『また……肯きませんよ……サア、今妾が云つたことに、明白な答

辯を爲さい。』

明白な答辯と來たもんだ。

ウフ、、、流石は第一高等女學校出だけあるぞ。

『ウム……實はなんだ。智惠さんが、島田を結つてるのを見て、急にお前のあの晩の島田姿を思ひ出したから、これからはもう髷なんか止しにして、島田ばつかり結はして置かうと思つて……。』

『馬鹿野郎ッ……。』

『なに……。』

『なにぢやなくつてよ。』

『……。』

『そも〳〵髷と云ふものは、どう云ふものが結つて・島田といふ髪は、どんなものが結ふべき髪か、あなた知つてらつしやるでせう。』

『そりや知つてるさ、女が結ふのさ。』

『當り前ですよ。女が結ふにきまつてますが、島田といふのはね、娘が結ふもので、髷は人の妻となつたものが結ふんですよ。』

『其の位なことは、乃公だつて知つてるさ……。』

『知つてゐらつしたら、なぜ妾に島田に結へなんておつしやつたんです？。』

『それがさ、乃公は島田が好きだからさ……。』

『いくらあなたが好きだからつて、妾が島田にでも結つてゐてごら

んなさい、他人が氣でも狂つたんぢやないかと思ひますわ！。』

『どうして？。』

『どうしてつてさうぢやありませんか、人の妻となつてゐながら、島田に結ふなんて……。』

『他人はなんと云はうと、良人さへ信じてゐれば宜いぢやないか……。』

『それだから不可ませんよ。良人なんかどうでも宜いんです。世間が何より大切ですよ。』

ウェッ、良人なんかどうでも宜いと來たもんだ。

『だつて、乃公は、どうも島田が好きだから、どうかたのむから、

一遍で宜いから、島田を結つて、乃公に見せて呉れ……。』

『あゝ判りました……。』

『なにが？。』

『なにがぢやないわよッ……。』

と、ワイフはいきなり、乃公の胸倉を引つ掴んだ。

『ウワッ……オイ〳〵何をするんだ。』

『なにをするんだぢやありませんよ。あなたは〳〵、ほんとうに〳〵、なんでそんなに浮氣ものなんでせう。』

『これはおどろいた。乃公が浮氣ものとは、何時乃公が浮氣をした？。』